

## 事業完了報告書

### 調査研究期間等

調査研究期間	委託を受けた日 ~ 平成30年3月16日
調査研究事項	《委託研究》 【広島市立二葉中学校】 イ 入学希望既卒者に関すること ・ 夜間学級における受入態勢や指導方法等について エ 外国籍の者に関すること ・ 効果的な指導方法等について 【広島市立観音中学校】 ウ 不登校となっている学齢生徒に関すること ・ 夜間学級における支援について エ 外国籍の者に関すること ・ 効果的な指導方法等について
調査研究のねらい	【広島市立二葉中学校】 【広島市立観音中学校】 別紙のとおり
調査研究の成果	【広島市立二葉中学校】 【広島市立観音中学校】 別紙のとおり

## 1 調査研究のねらい

【広島市立二葉中学校】（イ 入学希望既卒者に関すること エ 外国籍の者に関すること）

入学希望既卒者の中には、不登校を経験した人やさまざまな事情を抱えた人がいることから、生徒一人一人の特性に合った学び方を尊重し、受入体制や指導方法等について研究する。

夜間中学に通う外国籍の生徒は、年齢層が広範囲に渡り、学習歴や日本語の習熟度が異なるため、生徒一人一人の学習状況に応じた効果的な指導方法等について研究する。

（課題）

- ・ 日本語の習熟度が低い生徒に適した教科指導
- ・ 学習の習熟度に差がある生徒への教科指導
- ・ 母国語が不十分な生徒への日本語指導及び教科指導
- ・ 日本語学習から教科学習を主とした学習へのスムーズな移行
- ・ 既卒者が入学した場合のカリキュラム等の編制

（その課題を持つこととなった背景）

- ・ 10代から60代までの幅広い年齢層、修学年数の違い、また日本での滞在期間・生活状況などの違いにより、各生徒の日本語習得状況や学習の習熟度に差がある。（参考資料参照）
- ・ 中国語の読み書きが困難な生徒は、中国語の解説書も役に立たず、理解することが難しい。
- ・ これまで外国籍の生徒中心にカリキュラム等を編成してきており、既卒者が入級した場合、変更する必要がある。

以上のことから、生徒一人一人の学習状況に応じた効果的な指導や教材の在り方について研究を深める必要がある。

## 2 調査研究の成果

【広島市立二葉中学校】

（1）本年度の取組について

上記のねらいを達成するため、本年度は、教員研修と情報収集を柱に次の取り組みを進め、実践に結びつけてきた。

### ① 教員研修

- ・ 4月 第1回研修会

教員全員で研修を行い、本年度の生徒状況を把握するとともに、各学習グループにおける各教科の年間指導計画を立てた。また、評価方法について共通理解を図った。

- ・ 7月 第2回研修会

個々の生徒の学習状況や習熟度等について情報交換を行い、生徒一人一人の実態を把握し、教科の指導法や教材について検討するとともに、学習指導や学習内容の充実・改善を図る場とした。

- ・ 8月 第3回研修会

講師を招聘し「日本語指導について」の研修を行った。「生徒あつての教師の存在」と題して、日本語教育の要点、「話す・聞く・書く」ことの重要性、繰り返し学習などについて講話していただき、授業を進めていく上での大切なことを研修することができた。

- ・ 10月 第4回研修会  
前期の学習状況の確認と生徒状況の把握を行い、後期の取組内容の確認を行った。また、評価方法について再確認した。
- ・ 2月 第5回研修会  
年間カリキュラムや評価、学習指導、生徒指導など、各項目について今年度の成果や課題を出し合い、意見交流を行った。
- ・ 3月 第6回研修会  
今年度の成果や課題をまとめ、来年度へ向けての準備を行った。

## ② 情報収集

- ・ 12月 大阪府大阪市立天王寺中学校夜間学級を視察した。  
国語の授業見学を行い、同じ時間と空間の中で学び合うことで「学ぶ楽しさ」「わかる喜び」を共有できるような授業づくりの工夫改善が、生徒の学習意欲を高め、効果的な学習につながると再認識することができた。見学後は生徒とも交流し、夜間学級で学ぶ生徒の願いを参加者全員で共有した。また、他校教員との情報交換を通して、補助教材の作成や指導方法についての情報を得ることができた。

## ③ 授業実践

研修や収集した情報を活用して、生徒の実態に応じた教材を作るなど、わかりやすい授業づくりに努めた。また、日本語の理解力や学力差の大きい授業では、個別のプリントを用意したり、ITを取り入れたりするなどして、個々に応じたペースで学習ができるようにした。

外部講師による異文化体験交流学习では、音楽を通して他国の文化に触れ、異文化理解を図るとともに、さまざまな活動をすることで音楽の楽しさや素晴らしさを実感することができた。また、体験学習や野外活動を通して日本の歴史・文化・自然に触れ、日本社会で前向きに生活していこうとする姿も感じられた。

## ④ オープンスクール

- ・ 11月 オープンスクール実施  
夜間学級に問い合わせがあった生徒1名が参加した。夜間学級の雰囲気を感じ、入級の意味が高まったようである。広報については、今後の課題である。

## (2) 改善充実の成果・課題について

- ・ 教科指導においては、教科担任で各学習グループ・個人に適した教材を作成することにより、生徒の実態にあった指導を行うことができた。より身近な題材を教材として学習内容に取り入れることで、生徒の興味や理解度を高めることができた。
- ・ 日本語学習の段階から教科の学習をすることは定着してきた。今年度も、社会、理科、数学、英語を週2時間とし、学習内容を深めることができた。
- ・ 基礎的な語彙力を効果的につけるため、パワーポイントなどICTを積極的に取り入れ、バリエーションをつけて学習した。ゆっくり、じっくり、繰り返し学習することで語彙力が定着してきた。ICTは今後も積極的に活用していきたい。
- ・ 学習内容や生徒状況について情報交換を行うことにより、教材作り等に役立てることが

できた。また、共通の指導内容を確認して授業を進めることができた。

- ・ 継続して学習してきた生徒については、個々の力に応じた教材を提示することで、集中して学習に取り組み、進歩の度合いに違いはあるものの順調に学力が向上している。しかし、健康面や仕事、家庭の事情などで出席が安定しない生徒への効果的な学習支援の方法や対応は難しく、引き続きの課題と捉えている。
- ・ 日本語の習熟度の差が大きく、教科学習の習熟度の差も大きい。限られた教員数と時間数の中で、教科学習における習熟度別授業をどのように実施するのが今後も課題である。また、日本語学習が必要な外国籍の生徒と日本語学習が不必要な既卒生徒（日本人）と一緒に学習することになると、これまでのカリキュラムでは十分な対応ができなくなる。それぞれのニーズにあった授業展開をするためには、学習グループ編制が重要になってくるが、限られた教員でどこまで対応できるか、大きな課題である。

#### <参考資料>

### 1 本年度、本校夜間学級に籍を有した帰国入国者における状況

#### ① 年齢別・帰入国別人数

年代		10代	20代	30代	40代	50代	60代	計
男性	帰国	0	0	0	0	1	1	2
	入国	1	0	0	0	0	0	1
女性	帰国	0	0	0	1	0	0	1
	入国	2	2	4	4	1	0	13
計		3	2	4	5	2	1	17

#### ② 入級前の最終学歴

	未就学	小4	小5	小6	小卒	中1	中2	中3	計
男性	0	1	1	0	0	0	1	0	3
女性	0	0	0	1	3	5	4	1	14
計	0	1	1	1	3	5	5	1	17

## 1 調査研究のねらい

## 【広島市立観音中学校】(学習指導に関すること)

本校には日本人、ネパール人、中国人が在籍し、年齢層は10代から40代と幅広く、学習歴も様々である。義務教育内容習得が不十分な既卒者も入級している。よって、日本語の習熟度が低い生徒に対する日本語指導及び、義務教育内容の習得が不十分な生徒に対する教科指導が課題であると考えた。

そこで、各国籍の生徒一人一人の状況に応じた効果的な指導や教材のあり方について研究し、生徒の学力向上に資することをねらいとする。

## (課題)

- ・ 日本語の習熟度が低く、また学習速度も遅い生徒に対する効果的な学習指導
- ・ 継続的な登校が困難なため日本語の定着度が低く、初級後半レベルの日本語学習が難しい生徒に適した学習指導
- ・ 日本語学習を主とした学習段階から、教科学習を主とした学習段階への移行
- ・ 義務教育内容の習得が不十分な日本人生徒に対する教科指導

## (その課題を持つこととなった背景等)

- ・ 国籍・年齢も母国での学習歴も来日後の生活環境等も出席状況までも異なるさまざまな生徒が、少人数グループでとはいえ、一斉授業で日本語入門から学習するため、生徒間の日本語の学習速度や習熟・定着度には大きな差がある。
- ・ 数年前から、出席状況や生徒の年齢等により、日本語初級の前半終了時点で既に学習内容定着に差が生じる状況が見られ、既習事項の定着を前提として展開される教科学習の教材の学習内容を理解するのが困難な生徒が多い。
- ・ 中国人生徒の中には、未就学やそれに近い実態のため中国語の読み書きすら困難で、翻訳解説書中国語版が学習理解の補助教材とならない生徒もいる。ネパール人生徒においては、ネパール語版の翻訳解説書はまだ発行されていないため、英語を日本語学習の補助媒介として使える若年生徒と違って、英語どころか母国での学習歴自体がないような中年生徒は、結局わずかな日本語で日本語を学ぶしかないため、日本語の定着は非常に困難である。彼らに対して、多く速く教えることよりも、日本語を確実に定着させるため、絵や実物を活用したり反復練習等を多用したりするなど工夫しているが、理解・定着が困難な生徒もいる。
- ・ 日本語教材だけで行う日本語学習では、日本語力はある程度までで進歩が滞ってしまいがちである。日本の文化・社会・歴史・生活習慣等を幅広く学ぶことによって全体的な日本語力が向上を図れるのだが、生徒の多くの認識はなかなかそこまで達していない。また、日本語能力は初級レベルであり、その日本語と中学校教科書の日本語にはかなりの開きがあるため、日本語による教科学習は自分にはまだ早いと考える生徒も多い。
- ・ 本校は従来より日本人生徒を多く受け入れており、義務教育内容未修了者への教科指導にはそれなりの実績がある。しかし、今年度より既卒者・義務教育内容の習得が不十分な生徒を迎え、さらに「工夫された授業」によって効率よく学習指導し、短期間で成果を上げる方法について調査・研究する必要が生じた。

以上のような状況の中で、より効果的で生徒の学習意欲を高めるような取り組みについて取り組む必要があり、日本語指導チーム・教科指導チームを中心に効果的な日本語学習自主制作教材の作成及び「行事を通じた日本語指導」について調査研究する。また、夜間学級における「不登校生徒」への対応について討議し、オープンスクール開催へ向けての調査研究・情報収集もおこなう。

## 2 調査研究の成果

### 【広島市立観音中学校】

#### (1) 本年度の取組について

上記のねらいの達成を目指して、本年度は次のような取り組みを行い、実践に結びつけ成果をあげた。

##### ① 教員研修

\* 添付資料 1

年5回、校内で担当教員による本年度の授業に関する研修会を開催し、生徒個々の状況を把握するとともに、本年度の学習グループ編成や年間カリキュラム・使用教材・指導方針・方法について意見交換を行い、学習指導に対する意識統一を図る場とした。また、「夜間学級による不登校生徒への援助」に関する研修会を開催し、情報交換・オープンスクール開催等について討議を重ねた。さらに「テキスト・副教材検討委員会」・「テキスト・副教材作成委員会」を経て今年度作成した「自主作成教材」の交流・研究・討議を継続的におこなった。

##### ② 情報収集…先進校視察により、参考にすべき多くの点を学ぶことができた。

平成29年 12月1日（金）大阪市立天王寺中学校

<外国籍の生徒への学習指導について（教科・日本語）>

今年の新入生は9名だった。内訳は日本17人（40）%、朝鮮・韓国20人（46）%、中国3人・台湾2人マリ1人で、計43名の生徒が在籍している。生徒の60%が外国籍の生徒である。生徒の年齢は10代～80代までと幅広いが、60代以上が半数以上を占めている。

教科学習を充実させるために、すべての学年・学級で9教科を学習している。「日本語の学習をしたい」という生徒の声に応え、2011年度から国語の時間に識字と日本語に分けて学習を行っている。クラス分けについては、日本語の力を基本として行っているが、教科によってはクラス内の学力の差が大きくなることもあり、苦慮している。数学の習熟度別授業や入り込み、体育の入り込み等、可能な限り工夫をしている。また天王寺中学校には通信部があり、スクーリングできるようになっている。

生徒会役員会や韓国・朝鮮の生徒をはじめ、日本人や他の国・民族の生徒が集まる民族学級「ウリマダン」を週1回程度行い、さらに生徒を中心とした他校との交流会も定着している。昼の天王寺中学校や大阪市や三重県の昼の中学校との交流を毎年行っている。

1組の国語の授業では10人の生徒のほとんどが高齢で外国籍だった。難しい同音異義語の漢字を探しながら、時にはまわりの仲間に聞いたり一生懸命鉛筆で一字ずつ書いている様子に「学びたい」という気持ちを感じられるすばらしい授業だった。身近に知っている四字熟語の学習もあり、生徒の実態に合わせたわかる教材が使われていた。2組の英語の授業では小文字を書くという学習内容で、教員の板書した文字をしっかりと見ながら工夫してノートに書いていた。生徒は集中して授業を受けていた。3組の音楽の授業では合唱に取り組んでいた。生徒たちの表情が明るく、充実した学習が行われている様子だった。

<不登校生徒への夜間学級での支援について>

大阪市立天王寺中学校の夜間学級山脇秀介教頭に、昼間部における不登校生徒への支援・取組みについて質問したが、「現状では、不登校生徒への支援・取組みは行っていないし、そういう規定もない。大阪市全体に受け入れはなく、近畿では京都市立洛友中学校だけ昼間部における不登校生徒への支援を行っている。」とのことだった。平成30年2/19時点で再度確認したところ、上記内容に関しては変更なしである。

<先進校視察で参考になった点>

- ・生徒の一人ひとりの学習意欲に応える授業づくりに力を入れる

- ・工夫して実践的・効果的な学習指導方法をしている
- ・仲間への思いやりの心を持ち、互いに支えあう
- ・生徒の健康面や安全面を配慮した取り組みの充実に力を入れる

### ③ 授業実践

外部講師等による多様な文化体験を通して日本語に触れさせ、学習意欲の向上に努めた。また、日本語初級グループにおいて、研修や各自収集した情報を活用して、生徒実態に応じた学習教材を準備し、分かりやすい授業づくりを調査研究し、成果を出した。

#### <行事を通じた日本語指導>

- ・ 7月 異文化交流（日本伝統文化…盆踊り）[観音公民館]
- ・ 10月 スポーツ交流（グランドゴルフ）[観音公民館]
- ・ 11月 校外体験合同学習 [広島市こども文化科学館・広島城]
- ・ 12月 音楽を通じた日本語指導（講師：森崎皓）
- ・ 2月 国際理解講座（中国スポーツ文化交流 講師：関羽司龍）

#### <効果的な日本語指導自主制作教材>

- ・日本語初級Ⅰ（夜ＡＢグループ）
- ・日本語初級Ⅱ（夜ＢＣグループ）

### ④ 不登校生徒受け入れに向けての取り組み

夜間学級における「不登校生徒」への対応について討議し、オープンスクール開催へ向けての調査研究・情報収集をおこなった。「夜間学級で学んでみませんか?」・「オープンスクール～夜間学級見学会～お知らせ」の２種類の啓発資料を作成し、11月当初より校内に掲示し呼びかけをおこなった。

## (2) 改善充実の成果について

### ① 研修・教材作成

- ・年間を通じた研修・教材作成により、授業スタイルが全クラスで統一され、教員同士の引き継ぎがスムーズになった。
- ・今回作成した「読解問題」では答えの文を記述することにより、文型の使い方の理解が進んだ。またポイントを絞った理解について、生徒の意識づけ・習慣づけが進み、読解能力が向上してきている。生徒については日本の生活習慣や文化に興味を広がり、母国との違いや共通点について伝えたいという気持ちへとつながった。教科学習を行うCグループにおいては、資料を読んだり説明を聞くことで、教科特有の言葉や漢字の意味に興味の幅が広がり、主体的な学びへとつながってきている。

### ② 授業実践・行事

- ・「会話」指導で、いつ・どこで・誰が・何をなど簡単なポイント理解から生徒は会話の流れを意識し、場面を推理しながら聞くことができるようになった。それに伴い教員の指示や発問に対しても流れから理解し、分からなかった言葉は後で聞けるようになった。問題により内容をより深く理解できるようになったことで、会話の流れを身近なものとしてとらえ、イントネーションや表情も意識しながら練習できるようになった。
- ・今年度は手話を交えた合唱曲に取り組み、各行事や見学者・視察来校時等様々な場面で発表し、多くの人に感動を与え交流を深めることが出来た。「音楽のタベ」では普段接することのないミュージカルを鑑賞し、多くの生徒が感動し、国を超えて音楽を楽しめる会となった。
- ・地域交流事業では、観音学区体育協会の方にご協力いただき、少人数グループで行動することによって生徒一人一人が深く交流でき、日本語実践の場として有意義な活動となった。

- ・二葉中との合同校外学習は、前年度に引き続き行うことができた。今年度は、現地での交流方法、内容などを年度当初から両校の係担当で相談をしながら進めたため、事前学習でしっかりと取り組むこともでき、より一層両校の交流を深めることができた。

### ③ 不登校生徒受け入れに向けての取り組み

- ・「学齢期不登校生徒の受け入れ」について論議し、夜間学級のできる支援のあり方を模索した。「夜間学級で学んでみませんか?」・「オープンスクール～夜間学級見学会～お知らせ」の2種類の啓発資料を作成し、校内掲示することができた。

## (3) 改善が見られなかった原因

### ① 研修・教材作成

- ・授業スタイルが全クラスで統一されてきてはいるが、教材の目的についての認識は教員間で統一できておらず、研修や日々の引き継ぎで意見交換を行い、認識の統一や教材の改善を図っている。
- ・今回の教材は生徒の「話す」・「読む」に対する苦手意識を解消するきっかけになりつつある。教員間での各教材に対する認識も統一しながら、来年度以降も継続し、日々改善していくことが大切である。
- ・仕事の都合上欠席が多いため、基礎知識についてはプリントでの家庭学習が中心となった。知識が定着していないため、理解が曖昧であったり、自分の言葉で表現できないなどの課題が残った。来年度も検討を重ね、これらの課題解決に向け研修を継続していきたい。

### ② 授業実践

- ・1年を通して、日本語で「わかりたい」から自力で「だいたいわかる」までは達成できたが、「よくわかる」というレベルまではいっていない。生徒がどの部分で躓いたかを知り、その躓きを学び直す教材作りも必要であると感じた。教科学習をしながらその中で日本語を習得させるという本校の目標に近づけるためには、今後、授業作りをどう系統的に行っていくのかを、教師側の研修を進めながら考えていくことも必要である。
- ・コミュニケーション重視の学習とはいえ、内容ごとに単元別確認テストを実施して定着度の確認と復習を行っている。文法は理解し、定着してはいるものの、単語そのものを書く語彙力が不足している。全教科に言えることであるが、学校での学習だけでは限界がある。一日の生活状況を把握して、適度な量の家庭での課題プリント等を作成し、学校での補習の実施とも併せながら指導していきたい。
- ・英語学習を通した日本語指導では、頭の中で整理して慎重に発話してしまうため、発話するまでにかなりの間が生じる。そのため、会話に必要な雰囲気と表情がぎこちなくなりスムーズな意思伝達ができにくい。文法にとらわれすぎない生き生きとした、表情豊かな会話を目指したい。
- ・行事を通した日本語指導については、当日のプログラムをさらに充実させ、休憩時間等を利用して、地域の人との交流を更にはかかっていきたい。

### ③ 不登校生徒受け入れに向けての取り組み

- ・12月5日から7日までの3日間、教科指導C・D班2グループの授業見学及び行事参加のオープンスクールを計画したが、参加者ゼロに終わった。京都市立洛友中学校・朝岡洋一教諭による「不登校を経験した学齢期の中学生と夜間部の生徒が共に学ぶ学校の取り組み」に学ぶ研修会の実施を考えている。